

これは大阪という都市が経験した史上最大のジエノサイドといえるだろう。まさに大阪は、どこを歩いても血で汚され、累々たる死者が横たわる「ネクロポリス」(死者のまち)となってしまった。

その後、江戸幕府の主導で、大阪復興が行われる。その際に日本全国各地から集団就職のように町衆が集められたが、その構成員の多くは長い戦乱によって主君や土地を失った武家だった。実際に元禄時代にあまりの財力で商人の分限を超えたと闕所された伝説的な大阪豪商の淀屋は元は信長に滅ぼされた岡本家の子孫であるし、現在まで財閥として現存している住友家は秀吉に滅ぼされた柴田勝家の家臣の子孫で、鴻池家もまた毛利氏に滅ぼされた山中鹿之助の子孫である。

こうした無数の無縁者たちの懸命の働きによって、大阪は商業流通都市「天下の台所」として劇的に発展していく。夏の陣(1615)から「浮世」と浮かれ騒いだ元禄時代(1688～1704)に至る成長のダイナミズムは、実は戦後の高度経済成長に匹敵するほどの規模とエネルギーであったかも知れない。

ただ戦後と違うのは、江戸時代は封建社会で、商人は社会的に抑圧されていた。なにか武士に不届きなことをすれば「無礼打ち」をしても許される(『公事方御定書』71条)という時代で、どれだけ富を蓄積しようとも、本質的に商人の社会的な立場は弱かった。

そして筆者が思うに、こうした社会的弱者の最たるもののが、誰にも供養されない死者=無縁仏で、当時の大阪の町衆が無縁仏にシンパシー(同情)やエンパシー(共感)を持つのも不思議はなかったと推察している。そういった商人の社会的抑圧から無縁仏を供養する大阪七墓巡りの風習が起こったのではないだろうか。

また七墓のひとつである野江墓地は仕置き

場(刑場)で、ここは豊臣の残党を処刑した場所という。であるならば、七墓巡りで供養する無縁仏は、実は「豊臣方の死者」も含まれてくる。時代は徳川の天下であるので、公に「豊臣家の死者供養」はできない。なので「無縁仏を供養する」と七墓を巡りつつ、実は「豊臣方の遺恨」や「非戦闘員の大量虐殺」といった「ネクロポリスの記憶」を密かに伝えていくといった意味もあったのかも知れない。とくに初期の七墓巡りでは、豊臣方の武家の子孫も多くいて夏の陣の記憶も新しいので、そうした供養の意味合いが強かっただろう。それが元禄時代ぐらいから多様な人々が参加してきて、演芸化、遊興化、娯楽化していったのではないだろうか。

5 七墓巡りの終焉

さて、こうして江戸時代に一世を風靡した七墓巡りだが、明治以降は一気に廃れて、昭和には完全に影も形も無かつたという。なぜなくなったのかも不明な部分が多いが、大阪が近代化するに当たっての都市改造で、墓地の移転や統廃合がなされたことの影響は大きかったと筆者は推測している。さらに江戸時代は町の管理だった墓地が、行政の監理になつたので、無縁者の集まりという七墓巡りなどは、旧弊な風習と見なされて自然淘汰されて生き残れなかつたのだろう。いま現在、七墓のほとんどは繁華街や住宅地、公園、商店街などに変貌てしまい、地元住人も自分のまちが元墓地であったことなどすっかり忘れてしまっていることが多い。

6 東日本大震災から生まれた大阪七墓巡り復活プロジェクト

さて、以上は大阪七墓巡りの簡単な紹介であったが、筆者は普段は観光やまちづくりのプロデューサーとして活動している。仕事

柄、大阪のまちを案内することが多く、その中で大阪七墓巡りの風習を知ったのだが、その後、個人的な興味で元墓地の場所を訪ね歩いたりしていた。それを自分一人だけではなくて、いろんな参加者を募って歩いてみようと、2011年の春に「大阪七墓巡り復活プロジェクト」という団体を立ち上げ、同年の盆に、有志で七墓巡りの跡地を辿るツアーを行った。なぜそんなプロジェクトを立ち上げたのかとよく聞かれるが、これは2011年3月11日の東日本大震災による福島原発事故の影響が非常に大きい。

というのも、いま日本全国各地に原発が建っているが、それらは地元住民の賛同の下に建てられている。もちろん地元住民全員が賛同しているわけではなくて、反対の住民もいるだろうが、最終的には多数決という選挙の結果で誘致が決定したところが大半だろう。しかし、筆者は生きている住民の賛否だけで原発誘致を決めていいものなのだろうかという疑問をいたいたのだ。なぜならば仮に原発に重大な事故が起こると、その被害は非常に甚大で、時と場合によっては数十年、数百年に渡って影響を及ぼしかねない。現在、生きている住民だけで原発誘致を決めるには、あまりにも責任が重すぎるのではないか。

そもそも、まちには我々が存在する以前に、そこに根差して生きてきた「過去の先人たち」がいる。さらに、我々の後には、いままだに生まれてはいないが、そのまちで生きていくであろう「未来の後人たち」がいる。我々は、ただ、その「先人」と「後人」の両者の間に、つかのま存在しているだけの、まちの「仮の住人」に過ぎない。そのことを忘れて、なんでもかんでも一過性の選挙で決めてしまうのは非常に危険なことではないかと考えたのだ。

これはなにも筆者だけの特異な考えではなくて、例えばイギリスの作家G.K. チェスター

トンは「伝統とは、あらゆる階級のうちもつとも陽の目を見ぬ階級、われらが祖先に投票権を与えることを意味するのである。死者の民主主義なのだ。単にたまたま今生きて動いているというだけで、今の人間が投票権を独占するなどということは、生者の傲慢な寡頭政治以外の何物でもない」(『正統とは何か』)と「生者だけの民主主義」を厳しく諫めている。

そして、筆者は、このチェスターの「死者の民主主義」を考える機会として、かつての大坂の町衆の風習であり、失われた伝統である大阪七墓巡りは最適ではないかと考えたわけである。というのも、無縁仏を供養するという大阪七墓巡りを追体験することで、大阪の先人たちが、どのように死者と向き合ってきたかということがわかるし、それがわかれば、現代の我々も、どう死者と向き合えばいいのかということのヒントや指針になるのではないか。こうしたことから筆者は大阪七墓巡り復活プロジェクトは、大阪の先人たちと出逢うツアーであり、死者と生者が出逢う観光であることから、「死生観光プロジェクト」と名付けている。

7 無縁社会の中での七墓巡りの意義

さて、このプロジェクトを2011年から始めて、以後、毎年、盆の時期に実施していて、今年の2019年で9回目を迎えた。参加者は2011年は30名ほどであったが、そこから年々と増えていき、2018年には、ついに100名を超すほどになった。2019年は台風の影響で順延したので減ったが、それでも70名近い参加があった。

興味深いのは参加者が大阪のみならず、遠くは九州や東北、海外からの参加者など非常にバラエティに富んでいること。また20代～40代が多いことも特徴で、さらにいうと自身で子供がない「おひとりさま」の参加